

年少組、第一保育期

— 満四歳から満五歳 —

生活訓練

第五週

だん／＼幼稚園には馴れて来る。氣候はいよ／＼よくなつて着物も軽くなる。幼児の元氣が目立つて見えて来る。そこで——それを抑へてはなしに——訓練もし、易くなる。新入園そ／＼の子に、あの、きこまなく縮こんでゐる子に、訓練をしようとするのは大きな氣苦勞である。遠慮きいふではないが、氣がね、手控へは、さうしても已むを得ない。それが五月さもなれば、大分こつちもらくにやつてゆける。

人の話を聞いてゐる間、途中に口を挟んでものを言ふことは、悪いさいふではないが無邪氣な不作法である。無邪氣な不作法の多い日本人の風にして、こゝにいふ處に訓練の

缺けてゐる人が、いふ年をした大人にも少なくない。一體人への話し方には相當やかましく注意する癖に、人の話の聴き方には不注意に過ぐる場合が多く、識らず／＼無禮さもなり不謹慎さもなるものである。しかも、今話しをしてゐる人の話を仕舞ひまで靜かに聴かないさいふ位、粗野な不遜な過ちはない。勿論、相手を無視してゐる譯でもない。人の話を聴いてゐる間に自分の頭にいろ／＼の思ひが湧いて来て、それが溢れて流れ出すのである。殊に幼児の場合なき全くそれに外ならない。しかし、それにしても、それではスキッチのあけつばなしである。また、子さもながらに、自分を差し出過ぎるさいふものである。

これも自分を差し出過ぎる一つにして、何ごさにも先き

を争ふさいふ傾向が出初める。元氣の子に無理からぬ勢をいへばそれに相違ないし、見てゐて威勢のいゝこどももあるが、そこから、そろ／＼社會生活の訓練を與へる必要があらう。それが、お歸りの時に著しく、例の出口の込みあひを演じ出すのである。こんな時位、順々に靜かにさせたからきて、老紳士を強ゆる譯にもなるまい。一體、お歸りさいふ時には、相當強く抑へて靜かにさせる必要があるので、その一つとして當然である。又お歸りの時、ちよつと身の廻りの亂れを注意するこゝ併せてつきたい習慣である。なにも、おしやれの稽古ではない。たしなみは自ら心を落ちつける手段である。殊に、性質のガサツな、粗暴なこころのある子など、お歸りの時、相當時間をかけ、やかましくも言つて、整容させるこゝは、外形の問題でなく、内の訓練として効果多いこゝである。

第六週

幼稚園の庭にはいろ／＼の美しい花が咲く。初めての幼児にミつて、強い誘惑であるに相違ない。それを大切にさせるのは、公德ミか、植物愛護ミかの前に、先づ我慢の稽

古である。幼児にふさはしい自己抑制である。そこで、斯ういふ場合、花が取りたくなるならう心もちに先づ同情し、一應は是認(?)してかゝる位の態度があつてこそ、初めて眞に抑制に導き得るのである。先生だつて取りたい。が併し我慢するさいつた調子でゆくのである。初めから公德論を持ち出すのは少々早い。まして、花なんかさいふのは、幼児の心に觸れざること甚しい。それにしても、植物を大切にすることさいふこゝの全體の氣分は、先生自身の其の心持から傳へられるこゝで、それがなくては、たゞ規則になつて仕舞ふ。心持の訓練は、心持でなければ出来ない。

椅子に正しく腰を掛けるさいふこゝは、小さいこゝのようであるが、形の作法よりも、それから及ぼす仕事への氣分の影響が大きい。腰かけ仕事さいふ言葉があるが、あれは、座はるこゝを本位としてゐる日本人として、腰が浮いてゐては本氣でない。本氣になれぬさいふのである。しかし、椅子にだつて、しつかり腰をかければ、落ちつきも出來、力もはいる。それを、半がけ、横がけ、浮かしがけ、

さいつたこゝをしてゐる。其の癖がつく。まつ正面に、深きかけて、脊骨をまつ直ぐに、後ろへきちんみつつけて掛ければ、自然肩をそろい胸も張る。之れは單なるお行儀の稽古でなくて、精神である。殊に、そはくゝ落ちつきのない子なき、此の注意をしつかりする必要がある。正しく腰掛けるこゝは、正しく心を据えるこゝである。仕事をしつかりするこゝである。その意義は相當深い。

名を呼ばれた時明瞭に返事するのも、たゞ形の上の丁寧さばかりでなく、その次に來る話なり仕事なりへの、確實な態度を極めるこゝである。相手たる先生への禮儀さいふよりも、幼兒自身の心のしまりである。従つて、返事のよく出來ない時でも、それを無禮として叱つたりするよりは、もう一度、しつかりと呼んで、活を入れてやるさいつた調子がいゝであらう。そうしないさ、お返事ばかりよくして、仕事には氣は入れないさいつた風の悪い癖がついたりする。最もよくない癖である。

更春五月、ボカくゝ暖い。氣も浮きくゝする。しつかり腰を落ちつけさせ、しつかり應待もさせて、生活を緊張

させるこゝは、蓋し、大きな訓練である。

第七週

だんくゝ、室内の作業も多くなつて來る。その切り紙の層なきを、そのまゝ床に散らしつばなしにするこゝは、ふしだらの一つである。机の上に共同の籠なり箱なりを置いて、切り屑をそれに入れさせるのがいゝ。つまりは、もの始末の稽古である。しかも亦、洋風生活での床さいふものに就て、今まで何も訓練されてゐないのであるから、それは外の地面さ一つではないさいふこゝを教へてもやりたいのである。さうも、今日相當洋風生活が行はれてゐるのに拘はらず、床を正しく知らないのは大人にもある缺點である。會堂の床、劇場の床、電車や汽車の床、みんな少しも床さして意を用ゐない。甚しい粗野亂雑な扱ひをして平氣でゐる。それは、是非直したい悪習であり、幼い時から早く訓練する必要がある。紙屑位散らしても後で直ぐ掃除すればよいさいふが、そこがもう誤つてゐる。普通の座敷で、疊の上をそんなに散らかして平氣のものはあるまい。

すべて整頓の訓練は、一度散らかして置いて後から整頓

するのではなく、初めから不整頓をせぬやうに習慣づける
こゝが肝要である。紙屑を散らして置いて、掃除するの
でなく、初めから散らさぬやうにするのもそのためである。
そんな心を使つて居ては仕事が出来なからうといふ論も
出るかも知れないが、そこが習慣である。習慣さへつけば、
おつくうでもなく、面倒でもなくなる。識らずく切屑を
籠の中へ入れるようになる。

第八週

辨當のこゝに就ては、既に第三週に大體の注意が行はれ
た。こゝでは、更に進んで、多少こまかい注意に及んで
ゐる。つまり、食事の作法である。さて、こゝいふ習慣は、
家庭でつけようとしても中々むづかしい。ひさりだからで
ある。幼稚園では仲間がある。その社会的影響で比較的ら
くに習慣づけるこゝが出来る。それにしても、保育室以外
別に食堂をもつてゐる幼稚園があつたら、眞に羨望にたえ
ないこゝである。今まで仕事をしてゐた保育室を片つけて、
そこでお辨當といふのでは落ちつきがしつこりいかな

い。せめては白布でもかけたが、それも毎々よごされる
ので行はれ難い。たかゞ花でも持ち出し置き添へて、食
卓らしくする位のこゝで、その點、幼稚園のお辨當は、も
う一步工夫を要するこゝが多いであらう。

この週に於て、保育室の裝飾の手傳ひといふこゝが初め
られる。幼稚園といふ集團生活のために積極的に働くこゝ
ふ訓練の最初である。しかも、こゝいふこゝは、幼児が案
外喜んでするこゝで、殊に女の子なぎ、われ勝ちにこゝ手柄
めかしく立ち働いたりする。可愛いゝものである。たゞ、
中には、さんざ不精な子もあり、そんなこゝは人のするこ
ゝゝ極め込んでゐる若殿様もある。そんなのにこそ一層働
かすがいゝ。コロンビヤ大學幼稚園のコンダクトカリキュ
ラムの中では、こゝいふ仕事は保育要目として重んじられ
てゐるこゝいつてよい。訓練といふも、何々せぬこゝ、何々
しない習慣といつた風の消極的のこゝが多いが、斯うした
積極的行動の習慣も大に奨励されなければならない。